



文化研究家アックバス・アバスは香港文化を扱うきわめて魅力的な著書『香港 消失の文化と政治』(University of Minnesota Press, 1997) を発表し、ポストコロニアルな状況の中でいかに固定した文化的アイデンティティから逃れることが必要不可欠であるかを力説した。たしかに魯迅の文章における古い社会の批判とアバスが論じる奇妙に見え隠れする流動的な文化への所属感は一見まったく異質なものに見えるが、それぞれ異なるスタイルで共通の問題意識に接点を持っているともいえる。このような揺れ動く自己の立場を常に問い直すなかで、日本文学の研究を続けるのも不安ではあるが、挑戦に値するだろう。香港は直接日本文学よりも、広い意味で世界文学あるいは文学的なもの、たとえば詩に触れる優れた機会が訪れることがある。私の8年の仕事を経験を振り返ってみると、このような機会は実に多く感謝すべきである。

まず、思い浮かぶのはつい最近のことである。2015年の11月の末に現在香港で仕事している亡命詩人北島(ペイ・ダオ)の主催で行われたイベント「詩の夕べ」(Poetry Nights)。その時に、日本から二人の詩人が招かれた。水田宗子氏および多和田葉子氏である。水田氏は城西国際大学の理事長であり、日本の戦後作家大庭みな子の研究において第一人者である。不思議な縁で、数年前に水田氏は私が所属している城市大学で名誉教授となり、多くの聴衆の前で大庭みな子から得られる現代社会を理解できる知恵について指摘した。私の魯迅の『野草』に始まる旅は実は大庭みな子の作品にまでたどり着いたばかりではなく、執筆し終わったばかりの二番目の単著の出発点でもあるので、香港で大庭の著作を読み続けることは大変自然なものに感じられる。香港の学生さんは大庭みな子の作品について初めて知るの私の授業を通してではあるが、『浦島草』に対して深い興味を示してくれた。さらに、文学のコースではなく、一般的に現代文化における原子力の表象をめぐる授業でも、理科系の学生でも『浦島草』の断片を読むことがある。

原子力的文化表象の授業において学生が最後に触れることになるのは、多和田氏の「不死の島」という短編である。多和田氏の別の作品は、実は、私の第二の単著の最終章の対象でもある。第二の単著といえば、香港に移る前から構想を練り始めたものの、ようやく草稿を書き終えたところ。その内容の内、もっとも早く取り扱ったものも多和田氏の作品である。つまり、もう八年近く『アルファベットの傷口』についての、私なりの解釈を暖めていたことになる。ちょうど多和田氏の作品を扱う章の執筆中に、多和田氏に香港で直接お会いできたことは大変感動的なことだった。それに、「詩の夕べ」の開会イベントで、魯迅の著名研究者李欧梵の主催で、多和田氏は私の現在の企画である「群島」と共鳴するような想像世界について語った。その時、多和田氏は現代文芸論研究室の大学院生と一緒に私が組んだ香港ツアーに参加してくれ、私が興味を持っている写真家のアトリエや最も古い団地地区を訪れた。正直に言えば、今までの香港在住でもっとも幸せな一時だった。朗読会で多和田氏が黄色い傘の上に書かれていた「ハンブルクのきのこ」という詩を読んだときの姿がよく目に浮かんでくる。一緒にお茶を飲んだ近所のレストランへそれからよく行くようになったが、このような庶民的なところで多和田氏が数ヶ月前に来たことは、私の香港滞在中の研究の大きな励ましのように感じた。他にも、大変貴重な機会が訪れたのは、2014年の夏に、まさに私が所属している大学で実施された世界文学研究所(Institute for World Literature)による夏季集中講義であった。これは、数年前からハーバード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ教授の企画で、三年に一回本校ハーバードで行われ、その間の二年はそれぞれ世界のどこかの大学で開かれるものである。その時に、たしか現代文芸論の数名の大学院生も参加していた。そもそも、香港ではいわゆる外国文学研究—日本文学を含めて—が決して

盛んだと言えないので、助理教授として教える側の私にとって、久しぶりに大学院生の興奮した気分を味わうきっかけになった。そこには、若手で、大変優秀な研究者の代表として、以前現代文芸論研究室主催の「世界文学」をめぐるシンポジウム（2013年3月）にも招かれていたハーバード大学のカレン・ソンバー先生や、ニュージーランドのオタゴ大学所属の詩の研究者ジェイコブ・エドモンド先生が講師として招かれていた。ソンバー先生は日本研究でも日本・中国・台湾・朝鮮の間に存在していた文学的な流通に関して重要な業績を残しているが、私は日本文学と関係のないエドモンド先生のゼミに参加した。実は、久しぶりに大学院生に交じって精神的に若返る喜びと同時に、このゼミに参加すべき一つの重要な理由があった。私は始めて、指導教官として一人の優秀な大学院生に恵まれた。香港では、日本文学を専攻にする大学院生、とりわけ留学生がほとんどいないので、私が担当になった留学生も日本と関係なく、スペイン語圏と中国の現代詩の間の交流についての論文を執筆予定だった。博士論文の一部はすでに触れた北島に関するものだったので、北島について興味深い論考を執筆しているエドモンド先生に相談をしようと思っていた。エドモンド先生の仕事は実は、現代文芸論研究室でも注目することに値する。英語圏、ロシア語圏、中国語圏にまたがる、大変刺激的な詩の交流を扱った著書 *Common Strangeness* 『通常なる不思議』によって、若手ながら、国際的な注目を浴びていた。エドモンド先生は、ゼミで「複写」という切り口で文学評論や詩作を論じた後、運よく私が指導していた大学院生の博士論文の審査員の一人になることを快く引き受けた。このような優れた、しかしながら謙虚そのものの研究者に出会えたことは、優秀な大学院生の存在のおかげだ。しかし、その大学院生の指導こそは、香港という場で、世界文学の領域をより未知な方向で切り開いてくれたことに対して、今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

私はもともとスペイン語圏に暗いということもあり、中国文学に関しても、私にとっての魯迅の存在が大きすぎて、他の作家がほとんど見えない状態だった。しかし、この論文の指導を通して、まず中華人民共和国創立後における、冷戦構造の中のソ連を中心に広がるもう一つの世界文学の構想の、ほとんど研究されてこなかった次元の働きに気づかされた。大学院生と一緒に、1950年代の中国の文化外交における詩の役割、そして、南米のチリを代表するパブロー・ネルーダという詩人の中心的な位置を、中国の詩人艾青がチリを訪問した際に残した一連の詩を通して確認することができた。さらに、文化大革命の時期におけるスペインの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカが当時のアンダーグラウンドの詩人に与えた影響を、北島の小説や詩を通して明確にできた。最後に、現代詩人西川（多和田氏も知っているそうだが）によるアルゼンチンの作家・詩人ホルヘ・ルイス・ボルヘスの創造的な受容について刺激的な面を浮き彫りにできた。この論文の指導を通して、世界は確かに広いと、いささかナイーブだが、新鮮な衝撃をうけた。そういえば、現代文芸論研究室でも、スペイン語圏の文学は重要な柱をなしていたことを思い出す。このような論文指導体験の後で、私が執筆中の「群島論」に関係ある池澤夏樹著『マシアス・ギリの失格』（池澤夏樹氏も現代文芸論研究室の重要なゲストでもあった）をめぐる著者と元現代文芸論教授野谷文昭先生によるラテンアメリカを視野に入れた対談を、まったく新鮮な目で読むことができた。同じく私の「群島論」の一つの島をなす有吉佐和子の『ぶえると・りこ日記』の斬新な意味もよりくっきりと見えてきたような気がする。

現代文芸論のもう一つの柱である「翻訳研究」に関しても、私は、実は、香港で目覚めたといっても過言ではない。それについて、できれば、次の便りで述べたい。